

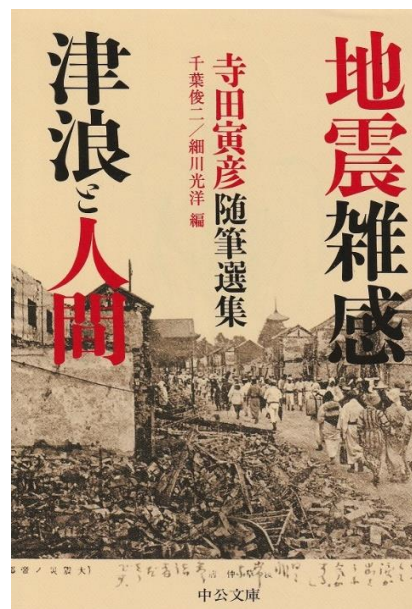
## 夜来たる - 寅彦とアシモフ

野村 学

寅彦の随筆「津浪と人間」（1933年）に次のような一節がある。

「夜というものが二十四時間ごとに繰返されるからよいが、約五十年に一度、しかも不定期に突然に夜が廻り合せてくるのであったら、その時に如何なる事柄が起るであろうか。おそらく名状の出来ない混乱が生じるであろう。」（『寺田寅彦全集 第七巻』・岩波書店・1997年）

いかにも寅彦先生らしい本質を突いた見方だ。確かに約50年に一度（しかも不定期に）となれば、「夜」という現象もそれを体験する人々にとっては「災害」となるだろう。反対に「二年、三年、あるいは五年に一回はきっと十数メートルの高波が襲って来るのであったら」もはや「天変でも地異でも」ない、とも寅彦先生は書いている。南海トラフ地震が「災害」でありうるのはその外力の大きさだけでなく、100年から150年に一度という周期がひとりの人間の一生にとってあまりに大きいため、ということもあるに違いない。人間と自然のタイムスケールの違いの問題である。“天災は忘れられたる頃来る”はこの隙間に生じるのだろう。こういうものの見方に気づかせてくれるのが寅彦随筆の魅力である。



寺田寅彦『地震雑感/  
津浪と人間』（中公文庫）

ところで、まさにこの〈突然夜がやってきたらどうなるか〉をテーマにしたSF小説がある。アイザック・アシモフの「夜来たる」（原題「Nightfall」）である。1941年の作品で「津浪と人間」より8年あとに発表された。ハヤカワ文庫版の解説にはこう書かれている。

「二千年に一度の夜が訪れたとき、人々はどう反応するだろうか……六つの惑星に囲まれた惑星ラガッシュを舞台に、“夜”の到来がもたらすさまざまな人間模様を描き、アシモフの短編の中でもベストの評価を勝ち得た、SF 史上に名高い表題作」（ハヤカワ文庫『夜来たる』・早川書房・昭和61年）

SF 好きにはなんともたまらない舞台設定であるが、アシモフはこの作品をアメリカの思想家エマーソンの詩に着想を得て書いたそうだ。その詩は以下のとおり。

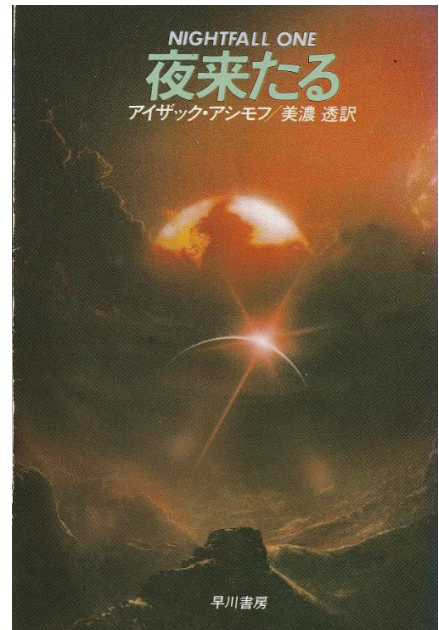
「もし星が千年に一度、一夜のみ輝くとするならば、人々はいかにして神を信じ、崇拜し、幾世代にもわたって神の都の記憶を保ち続ければよいのだろうか。」（前掲書より）

この詩の一節をもとに「SF 短編の最高傑作」ともいわれる作品を書くのだから、アシモフはすごい！と言わなければならない。

ここでアイザック・アシモフを紹介したい。ハヤカワ文庫の著者紹介を引用すると「1920 年、ロシアに生まれる。

3 歳で家族とともにニューヨークに移住。ボストン大学医学部で教鞭をとった後、執筆活動に専念」とある。続けて「SF、ミステリ、科学解説など、多方面にわたって活躍し、編著書は 450 冊を越える」とあり、この点、科学随筆を多く書いた寅彦先生と重なる。肩書きをみても SF 作家、生化学者（博士号を持っている）、科学啓蒙家など活躍の舞台は広く、この点でも寅彦先生を彷彿とさせる。そういえば寅彦先生には東京朝日新聞に連載した「話の種」という科学雑学の紹介記事があるが、アシモフにも『アシモフの雑学コレクション』（原題「ISAAC ASIMOV'S BOOK OF FACTS」）という様々な分野の雑学を短文で紹介した著作がある（日本語訳はなんと SF 作家の星新一！）。わたしは学生時代に「アシモフの科学エッセイ・シリーズ」（『空想自然科学入門』、『時間と宇宙について』、『真空の海に帆をあげて』など）をよく読んだ。このシリーズを『萬華鏡』や吉村冬彦名義の一連の作品集（『蒸発皿』、『触媒』、『蛍光板』など）と比べることもできるかもしれない。わたしに科学の面白さを教えてくれたと言う意味でも二人はやはりよく似ている。

さてわたしは“SF 史上に名高い”この短編を今まで読んだことがなかった。先日偶々あらすじを知る機会があり、すぐに冒頭引用した「津浪と人間」のフレーズが頭に浮かんだ。これはぜひ読まなければ！と思い、古書店で購入（もはや新刊では入手困難である）、一気に読んだ。まるで寅彦の随筆をなぞるかのように「人間と自然のタイムスケールの違いが生み出す悲劇」が描かれていた。随筆と小説という違いはあれど、寅彦とアシモフが個々別々に同じテーマの作品を書いたという事実は興味深いことだ。“知の巨人”の思考様式はやはり似てくるのだろうか。二つの「夜来たる」、読み比べてみると面白い。



アシモフ『夜来たる』  
（ハヤカワ文庫）